大人にはわからない日本文学史（髙橋　源一郎）

ずいぶん昔のことです。

わたしは、かなり遅れて（解散直前になって）ビートルズのファンになりました。わたしの周りで、音楽に「うるさい」友達は、ビートルズが来日する前からファンでした。そういうことはよくあることじゃないでしょうか。

わたしは映画の『ビートルズがやって来る／ヤア！ ヤア！ ヤア！』を見て（もちろん初公開されたときよりずっと後になってのことです）、「こりゃ、すごい！」と思いました。スタイルも、センスも、曲も、何もかもが、です！

そして、友人たちに「ビートルズってすごいんだね？」と言いました。すると、友人たちは、すっかりわたしをバカにして「おまえ、いったい、いつの時代に生きてんだよ。」と言ったのです。わたしはビートルズの過去の名曲を聴き、レコードを買い、「こんな偉大な人たちと同じ時代に生きていて良かった！」と思いました。そして、ついに、あの日がやってきたのです。つまり、「ビートルズの新曲」がラジオで（わたしにとって）初めて放送される日が。

わたしは、ラジオの前で正座し、激しく緊張したまま、その瞬間を待っていたのでした。おそらく、「玉音放送」を聞いた日本人たちも同じ気持ちだったに違いありません。

やがて、アナウンサー（ＤＪだったかもしれません）が簡単に曲を紹介すると、最後に「ビートルズの新曲です。」と言いました。

そして、ピアノの音が流れ始めました。それは「レディ・マドンナ」という曲でした。わたしは何とも言えぬ複雑な、そして大きな感動に駆られていました。そのせいで、きちんと曲を聴く余裕などありませんでした。

わたしは「レディ・マドンナ」という新曲を聴いたことにではなく、「歴史的瞬間」に立ち会ったことに感動していたのです。

それは、わたしが生まれて初めて「歴史」というものに触れた瞬間でした。

今思えば、わたしは、すごく単純な少年でした。

音楽というものは（よく知らないけど）、ベートーヴェンやモーツァルトといった過去の偉大な作曲家が過去に作ったものであり（だから、ビートルズは例外でした）、絵というものは（よく知らないけど）、ダ・ヴィンチやゴッホといった過去の偉大な画家が描いたものだ、と思っていました。

ついでに言うなら、文学というものは（読んだことはないけれど）、トルストイやゲーテやセルバンテスやドストエフスキーや夏目漱石といった過去の偉大な作家が書いたものだ、と思っていました（もしかしたら、それは正解かもしれませんが）。

じゃあ、新しい音楽や新しい絵や新しい文学というものは、どこにあるんでしょう。

そんなこと知ったことか、というのが、わたしの唯一の考えだったのです。あるかもしれないけど、それはつまらないものに決まってる、とさえ思っていたのです。いったい、どうして、わたしはそんなことを考えるようになったのでしょう。

おそらく、それは、わたしが学校で受けた歴史教育のせいだったのです。

古代から中世、そして近代へ。「歴史」の中ではたくさんの事件が起こる。たくさんの偉大な人たち（ナポレオンに織田信長）が、次々現れて、新しい時代を作ってゆく。

ところが、「現代」に近づくほど、「歴史」の授業は加速度的につまらなくなってくる。偉大なものも、立派なものも、おもしろいものも、どんどん少なくなってきて、ついには「歴史」とはそういうものだと思うようになりました。つまり、昔ははやっていたけど、現在にはゼロになる。わたしは、「歴史」とはそういうものだとおもしろそうなものは、いつも過去にある。

立派なものや価値のあるものは、いつも過去にある。

それが、幼いわたしに、いつの間にか備わった考え方でした。

この「歴史」というものに関する独特の考え方は、わたしが作り出したものではありません。人類が、自分がしてきたことを整理し、理解するために、作り出したノーベル賞級の発明だったのです。

「現在」とは自分のことです。

少し古い「過去」とは父親（や母親）であり、もっと古い「過去」は祖父（や祖母）なのかもしれません。

父親（や母親）は、自分よりずっといろいろなことを知っているし、力もある。そして、祖父（や祖母）になると、想像できないぐらいいろいろな経験をした、立派な人だ。そんなふうに、人々は考え、「歴史」もそういうものだと考えることにしたのではないでしょうか。

けれど、今では、父親（や母親）や祖父（や祖母）への敬意はすっかりなくなってしまいました。「歴史」がなくなった、と言われているのは、もしかしたら、そのせいなのかもしれません。

もう一つ、これとは全く別の考え方も存在します。

最も古い「過去」は産まれたばかりの赤ちゃんみたいなものだ。何もかもが新しく、新鮮で、みずみずしさに満ちている。ちょっと古い「過去」になると、その赤ちゃんは成長して、青年になり、さらに大人になる。傷つき、自分の可能性を疑い、でも、少しずつ、経験を積んでゆく。そして、最後に「現在」に到達する。ボロボロで老いさらばえた姿になって。

一見、正反対に見える、「歴史」に関する、この二つの考え方には、実は共通点が存在します。

それは、どちらも、時間というものは「不可逆的」だと考えている、ということです。

どんなに激しく求めても、「過去」は戻ってはこないのです。しかし、本当に、そうなのでしょうか？

わたしはもう半世紀以上も、たくさんの本を、とりわけ小説を読んできました。「現在」の小説を、ちょっと「過去」の小説を、それから、ものすごく「過去」の小説を。そして、ある日、わたしは突然、あることに気づいたのです。

それらの小説たちが、僕が聞いてきた評判とは、えらく違ったものであることに、です。

その「評判」というのは、「文学史」という、「文学」に関する「歴史」の中での評判でした。「文学史」という「歴史」の中で、例えば、「過去」の小説たちは、時には、敬愛すべき祖父（や祖母）のように、時には、みずみずしい赤ちゃんのように、取り扱われてきました。どちらにせよ、遠い「過去」の出来事、というか、遠い「過去」に、もう死んでしまった知らない作家が書いた作品であることに変わりはなかったのです。

なんか違う、とわたしは思いました。

それらは、祖父（や祖母）ではなく、赤ちゃんでもなく、よく知っている友達のような気がしたのです。

わたしは、文学をよく知っている人たちに、こう言いました。

「『過去』なんてないんじゃないかな。五十年前も、百年前も、みんな今と同じようなことを考えて小説を書いていたんじゃないかな。小説は、進歩もしてないし、退化もしてないし、要するに、あまり変わってないんじゃないかな。なんか、そんな気がする。」

すると、その人たちは、こう答えたのです。

「なに、子どもみたいなこと言ってるんだい。『文学史』を読んでみなよ。そんなこと、どこにも書いてないぜ。」

わたしは、ずいぶん久しぶりに「文学史」というものを読んでみました。確かに、その人たちの言うとおりだったのです。

わたしが、自分で「文学史」を書こうと思ったのは、そのときが最初だったかもしれません。

わたしは、「過去」の小説を、その「評判」から取り戻そうと思いました。陳列されているガラスの棚から脱走するよう、説得してみることにしました。要するに、「過去」で眠っているのをやめ、起きて、現在に遊びにくるよう言ったのです。

そして、「現在」の小説には、その逆に、「過去」に行って、「過去」の小説と遊んでくるよう命じたのでした。

「歴史」というものは、鑑賞するために壁に掛けられた絵ではありません。なんと言うか、それを使って、誰も考えたことのないヘンテコなものを作り出せるオモチャみたいなものではないでしょうか。いや、そうであるべきなのです。